

松下国際財団 研究助成 研究報告

【氏名】川口佳子

【所属】(助成決定時)京都工芸繊維大学大学院工芸科学研究科機能科学専攻

【研究題目】英国の室内装飾における感性戦略

— 趣味の展示空間としてのティールームと応接間のデザインを中心に —

【研究の目的】

室内空間をデザインする際、使い手の「感性」に訴える戦略があるとすれば、それはいかなるものだろうか。そしてそこには、どんな可能性(あるいは問題)があるだろうか。本研究はこうした課題を、歴史的な事例の中から検証するものである。英国の住居史および生活史において、人々の「感性」がとりわけ重要なテーマであった時代がある。19世紀後半から20世紀初頭にかけての、ヴィクトリア朝期がそれであり、当時人々は室内装飾において「良き趣味」という極めて感性的な基準の達成を追究していた。本研究は、そうした「趣味」論に対して、社交の場である「ティールーム」と「住宅の応接間」が果たした重要性、および両者の様式的な相関性を、当時の写真資料、業者のビジネス・レコード、言説(書籍、室内装飾雑誌の記事)から明らかにする。

【研究の内容・方法】

英国グラスゴー市において、以下の調査を行った。(1)ティールームと応接間の室内装飾に関する資料収集(2)上記資料の解読と、室内装飾の特徴の分析(3)以上を踏まえた「趣味」論の実相の考察である。

調査(1)では、19世紀後半から20世紀初頭のティールームと住宅の室内装飾の、設計と施行に関する資料や写真を収集した。調査機関としてはグラスゴー市の Mitchell Library 他、エジンバラ市の Royal Commission on the Ancient and Historical Monument of Scotland (RCAHMS), National Library of Scotland 他である。特に RCAHMS では、街路名ごとに体系的に整理された19~20世紀の建築および室内装飾の写真に多く触れることができた。

調査(2)では収集した一次資料を解読する。その際、室内装飾における「趣味」の善し悪しを論じた当時の一般的な手引書、雑誌の類の記述を読み合わせ、共通性と相違性を見いだす。具体的には、Kinchin 氏の研究におけるグラスゴー市内のティールームの所在リスト(街路、番地、所在年間を記したものを)を検証の上、さらに(1)から分かる個々のティールームの室内装飾の特徴に関して情報をまとめ、ティールームの様式の再リスト化を試みた。これと並行して、同時期に設計ないし改装を手がけられた住宅建築の応接間に関しても、同様に様式を挙げて整理した。そして、ティールームと住宅応接間の間でとりわけよく似た様式的特徴として、「家具類・壁面装飾の徹底した作り付け」を見いだした。

調査(3)では(2)で整理した、ティールームと応接間の室内装飾の、様式を比較し、影響関係と互換性を分析する。その際、両者に共通する「徹底した作り付け」の特徴を関連文献より調査したところ、fitmentと呼ばれる1890年代以降に流行した住宅の装飾の手法であることが分かった。さらに、これらの空間が支持される要因であった「趣味」の良さ「芸術性」といった感性的な基準について検討した。

【結論・考察】

すでに19世紀半ばより中産階級の住宅建築に多く見られていた cosy corner(装飾品によって「趣味良く」飾り立てられた快適な休息のための一角)の形態が、室内全体にまで徹底して広げられ、「作り付け」化したのが fitment と見られ、その登場時期が1890年代である。ちょうどこの1890年代にグラスゴー市で店舗数を増やしたティールームが、そうした住宅建築の新様式をタイムリーに反映したと解釈できそうだ。fitment の普及を主張する当時の文献は、その長所が、「清潔さ」や「経済性」「収納性」の向上にあると説明する。これらの具体的な指標で論じられることを通して、極めて感性的で曖昧な概念である「趣味」や「芸術性」が、一般的な理解を得ていく経緯に、fitment は一役買ったと指摘できる。そして fitment の効用を人々に実体験させるショールームのようなものが、様々な階級の饗応に開かれたティールームであったというのが、本研究の結論である。以上の研究により、ティールーム建築と住宅応接間の室内装飾の「趣味」論的重要性と様式的な相関性を、詳細に確認することができた。以上に補完的調査を加え、整い次第速やかに国内学会における成果公表を行う所存です。